

曹洞宗海晏山宛陵寺季刊紙

第4号/平成17年秋

はすのは

平成17年10月8日 発行人 浦辺世紀

発行所 海晏山宛陵寺伝道部 〒859-4527松浦市今福町仏坂免958宛陵寺内
電話；0956-74-0139 FAX；0956-74-1170 e-mail；cent@fine.ocn.ne.jp
環境；PowerMacG4(867) MacOS9.2.2 AdobePageMaker6.5J Canon-



「夏休み子ども寺子屋」に参加した子ども達と (17/7/26)

◎是非、ご家族の皆さままで、お読み下さい。

コラム

龍水

◆「育てたように、子は育つ」故相田みつを先生の言葉である。私のような者は大変ドキッとしてしまう。なんせ、良いときばかりの父親で、「子どもを育てる」ことにさほど積極的ではないからである。◆「目で見せて、耳で聞かせて、してみせて、ほめてやらねば、人はできよ」加賀大乘寺の清水浩龍老師の言葉である。何を見せ、聞かせるのか。もちろん金儲けや世渡りではないことは明らかであり、人殺しや戦争や争いごとでは決して無い。禅僧の言葉である以上それは、「ほとけを見せ、ほとけを聞かせ、ほとけをしてみせる」のである。◆しかし今の世の中は地獄と鬼の様相・・・人ができはあたりまえか。◆しかし「ほとけ」とは一体なんである。・・・(世)

「お袈裟のご縁」

昨年晋山結制の記念に、十五条衣の糞掃衣のお袈裟を、有志の方々に縫って頂きました(下の真参照)。そして今また、二十五条衣の糞掃衣に携わること縁を頂きました。春に衣財を募ったところ、たくさんのお古着を頂戴いたしました。明治時代着用されていた着物を、捨てるに捨てきれず「お袈裟になるのなら」と惜しみない心で持ってきていただき本当にありがたいです。物資豊かな消費時代に生きていた私には、見たこともない着物地に驚きました。捨てる事に慣れつつになってしまっている現代、何でも簡単に買える世の中に、物を大切にしている昔の人の生き方を改めて感じさせられました。時代は移り変わるうとも人の心はいつも、お釈迦様の教えを受け継いでいきたいと痛感しました。

ここでちょっと、お袈裟の話に触れてみましょう。

お袈裟のことを、田相衣または福田衣とも言います。田植え後の、あの青々としたさまざまな形の水田をかたどって作られたものです。福田衣には、田に種をまけば、秋には稲の収穫があるように、仏を供養し、仏法を信じると、必ず福報があるという意味があります。お袈裟は必ず「却刺縫(かえし針)」で縫わなければなりません。自分自身が縫うということが一番価値のあることで、上手下手をとやかくいうことは許されません。お袈裟を縫う心構えとして、手を洗い、室内に香をたき、心静かにして袈裟を信じ、一針一札の念を持って、他事に心を動かさず、ただ一心に却刺すること。裁断された布は、畳や床に置かず、必ず風呂敷などに包んでおくことなど道元禅

師様は、「正法眼蔵袈裟功德」に書き記されておられます。糞掃衣は、人の惜しみのかからないボロ布の丈夫そうなところを切り取り、よく洗い、つづりあわせて袈裟にしあげるので、いわゆる布の成仏なのです。袈裟の内容を最高度にあらわしたものが糞掃衣なのです。宛陵寺では「福田会」と称して、毎月、第2・4水曜日の午前九時から午後四時頃までお袈裟を縫っています。ご都合がつかれるお時間にもいつでもお越し下さい。お弁当と一緒に食べるのも楽しいですよ。江迎町清浄寺の檀家様であられる坂本マキさんにご指導を頂いております。坂本さんはお袈裟に携われて十二年、毎日欠かさず一針一針修行をされてる素晴らしいお方です。お袈裟の功德を伝えていただいております。(恵子)



皆様が縫われたお袈裟が、宛陵寺の伝衣として代々受け継がれる仏縁に感謝致しております。(恵子)

これからの御案内

八日講

十月八日・十一月八日は、十時より八日講法要を勤めます。

成道会

十二月八日は、九時より釈尊「成道会」を修行します。

いまから二、五三六年前、インドのブダガヤの地において、この命の真実の姿を、人のわがままを超えて明確にさとられたお釈迦様の存在を、心から敬う大法要です。

「転読大若祈禱」を合わせてお勤めします。数名の僧侶の随喜で、六〇〇巻の大若経を勢いよく転読してお参りの方々の肩をこの經典でお一人お一人叩いて頂きます。お参り頂いた方々の「健康と繁栄」を祈願する大変賑やかな法要であります。

更に、法要後のお説教は、福島町福寿寺の副住職、井手一成師にお願い致しております。たくさんのお参りをお待ちしております。

大晦日坐禅会・除夜大梵鐘

十二月三十一日は、夜十時より大晦日坐禅会をして、除夜の梵鐘を撞きます。一年の締めくくり、そして新年の始まり・・・。

宛陵寺要典に収録したお経を現代文になおして掲載します。原文はさし上げた「經典」をご覧ください。

經典をよむ

●摩訶若波羅蜜多心經 ③

(經典OPの5行〜6P3行) (經典OPの1行〜7行)

この故に、全てにおいて実体がないという真理においては、肉体も物体も固定した状態は無く、感覚・記憶・欲求・自己もありません。

眼の能力も、耳の能力も、鼻の能力も、舌の能力も、肌の能力も、意識の能力も固定した状態は無く、その対象である景色も、声も、香りも、味も、触感も、想いも固定した状態はありません。よって眼によって作られた領域も無ければ、意識によって作られた世界さえ固定した動かない状態は存在しないのです。

苦をもたらず原因である無知も固定した状態は無く、そのように実体がない無知が、起きなくなることも無いのです。老いや死は自然の摂理で特な作為では無いのでどうしようもありませんが、しかし生きていく限り、老いや死の苦しみが無くなることもありません。人生は思うようにならず苦しいが、固定した状態がないのかかわりようが無く、苦しみの原因も固定した状態がなく、苦しみが滅することも固定した状態がなく、苦しみを超える具体的な正しい方法さえも実体がないのです。

なぜなら悟りの智慧に固定した状態はなく、悟ろうとする働きにも固定した状態がなく、悟りという特な固定的状態があるのではない。(以下次号)

仏事の深意

「葬式」 第4回

無宗教葬はかっこいい!?

都市部では、友人葬、音楽葬、おれ食事式など、大変さかに行われているという。ほとけを拝む姿はなく、仲の良い人間どうしが慰め合うのだという。

一歩さがって考えてみると、信仰の薄くなった世の中となれば、日常生活の中に、手を合わせて仏祖をおがむことを亡くしているのに、いざという時だけなど、手の合わせようもない。極めて当然の世相であろう。

生まれたら手を合わせて「おかげさま・・・」結ばれたら手を合わせて「おかげさま・・・」ただいたら手を合わせて「おかげさま・・・」感謝すれば手を合わせて「おかげさま・・・」

その人のお陰は、その人のご先祖のお陰。ご先祖のお陰は尽十方界真実（大自然のありのままの姿）すなわち「ほとけ」のお陰様。

仏教の葬式は、「真実の命の姿」という、後戻りのできない大きな流れに運ばれている「命」と「自分」に気づき、手を合わせることによって、がっしりと受け止めるのである。

悲しんでも、悔やんでも、誰のせいによいとも受け止めるしかない。仏祖に手を合わせることでよって己の心を納め、「死を受け止める」ための厳かな儀式である。

ゆえに信仰（仏祖を信じて疑わない力）なくして、安心はないのである。人間どうしは揺れ動く。「ほとけ」は一度心を定めれば、うつろうことはないのである。(世)

【清女会新役員のご紹介】

- 会長 武部瑠璃子（仏坂）
- 副会長 立山喜美恵（寺上）
- 副会長 森永都美子（浜脇）
- 会計 末永 民子（木場）
- 監査 宮崎 照代（平尾）
- 監査 寺澤フサ子（坂野）

長年の心配であった役員が九月廿三日に決まりました。会の充実を図っていきます。宜しくお願い致します。



【祥月命日の回向を致しましょう】

三仏忌(降誕会・成道会・涅槃会)、彼岸会、施餓鬼会、八日講でのご先祖の「祥月命日」の回向を勤めております。

毎月行う公式法要の中で卒塔婆（ソトバ）を書いて戒名を読み上げてご回向させていただきます。合同回向となりますが、敬しい法縁と思えます。法要日の前日まで受け付け致します。

回向料〳五千元（卒塔婆代含む）

【坐禅会に参加してみませんか】

毎週土曜日の夜7時より一時間ほどです。老若男女どなたでも無料で自由に参加できます。一度きりでもかまいません。初めての坐禅もそのまま仏の姿です。初めての方は20分前に。